
図書室の貴公子、加藤君。

日高 マドカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

図書室の貴公子、加藤君。

【Nコード】

N3178F

【作者名】

日高 マドカ

【あらすじ】

なりたくない図書委員になってしまった主人公。しかし、主人公は図書室で貴公子？をみつけ恋をする

ラッキーガール図書委員

神様：

どうして私はこう…馬鹿なんでしょうか…

やりたかった委員会を全て譲ってしまいました。

結局。

図書委員になってしまいました…

「なーんてへこたれてたのは、昨日までのコト
私は最高に幸せだった。」

昨日

「ココ…？」

1度も行ったコトのない図書室に行ってみた。

図書室は、中も周りも

見るからに静かだった。

ガラッ

ドアに手をかける。

「…」

本当に静かだ。

呼吸の音さえも響く。

『…うーん』

図書室の奥

日なたのトコロ

長いイス

「っー」

私は言葉を飲む。

長いイスに足を組んで座る男子
見慣れた横顔だった。

『加藤君…だ』

少し白い肌

伸びた身長…

カッコいい！！！！

加藤とはクラスが替わってから
メールでしか話してない。

まさか ココまでカッコよくなってるなんて…

胸の高鳴り

私 恋しちゃった？

ガラッ

「ヨッシャー！！」

私は小さくガッツポーズする。

図書員バンザイ！！！！

「それでは、当番制で回していきます。」

ザワザワ

それぞれ解散し始める。

「ちえ、当番制かよ」

私は、静かに悪態をつく。

1カ月に1回くらいしか当番 こねえじゃん。

私は加藤君の為に昼休みを潰してまで
図書室に行きたいとは思ってなかった。

カウントダウンin図書室

学校から帰った私は、
携帯のメール作成画面を開く。

「……うゝん

どうしょあー」

じたはたとベッドの上で転げ回る。

「うゝん……えいつ」

カチッ

送信ボタンを押す。

愛しの貴公子様へ送信したメール
久しぶりのメールだ。

ゝゝゝ

メールの返信は

わりと　すぐ返ってきた。

『図書委員になったんだ。

頑張れよ(o^_^)b

図書には良い本がたくさんあるから

今度　読んでみなよゞ(*・_・*)』

良いのは本じゃなくて

お前だよ!!!!

鼻血が出そうな鼻を押さえる。

早く当番が来るといい

私はカレンダーをめくる

「し明後日かあー」

キンコーン

昼休みのチャイムが鳴る。

私は、図書室に直行した。

相変わらず本の数が半端ない。

『やっぱ　すごいなー…』

本棚を順番に見ていく。

意外にも面白そうな本が並んでいる。

『あ　コレ』

今ドキな本も置いてある。

私は　それを手に持つ。

その本を持ったまま

奥に進む

暖かい日の当たる場所

やっぱり彼は　いた。

このまま立ち続けるわけにもいかず

かと言って

隣りに座るわけにいかず。

私は　その場を立ち去る。

本を借りて図書室を出る。

明後日は当番だ

あと少し

次の日も

やっぱり私は図書室に行った。

だけど、

いつまで過つても加藤君は現れなかった。

それだけなのに

なんだか　心がホワホワと浮く感じ。

つまらないとか
そんなんじゃないんだよなー
なんなんだよ
一体…

カウントダウンin図書室（後書き）

コノ話しは私の今の実話な訳ですが、あと少しで図書当番です（o
^ - ^）bすごく楽しみです

図書室は君の場所？ 違うよね？

『図書室に来てね（・・）ノ』
早朝からメールを加藤君に送る。
返信はこなかった。

ガラッ

いつもより早く、
走ってきた私は
珍しく1番に図書室に着いた。

すばやく受け付けに入る。
慣れた手つきで受け付けを行う。

初めてやったとは自分でも思えないほどだ。

『あれ、この本さつきも誰か借りてたな…』
たくさんの本を眺めると
どれも読みたくなる。

「返します。」

低い声に顔を上げる。

加藤君だった。

『本当に来たんだ。ってか、いつも図書室にいますもんね』
図書室の空気では
どうもテンションが上がらない。

『加藤君：こんな本読んでんだ…』

パリりとめくる

そして バンッ と閉じる。

首のあたりを嫌な汗が這う。

加藤君が返した本は歴史の漫画本だった。

加藤君は歴史が好き。

私は歴史が大っ嫌い。

私は、眉間にシワを寄せつつも

その本を借りる

ピッ

読む気がうせる

図書室の空気が

その気持ちを盛り上げる。

右を見ても

左を見ても

あるのは本ばかり。

無機質にも程がある

図書室は　なんて冷たい場所なんだ…

加藤君は、いつもこんな所にいるのか…

不思議とコノ場所が嫌いになれない。

温もりなんてない

冷たさなんてない

まさに無の空間。

放課が終わって

すぐ図書室を出る。

あの無機質な所から出る。

下校

いつものメンバーで下校する。

すると

加藤君と同じ部活の子が
おもむろに鞆を覗く。

「どうしたの？」

「…加藤から本借りてたのに
返すの忘れてた」

サラリと真由奈「マユナ」が言うので

私は思わず

「なんて羨ましい！！」

と大声で言ってしまった

慌てて口を塞ぎ

周りを見る

右よし！

左よし！

加藤君いない！！

ほっ と胸をなでおろす

「加藤、言えば貸してくれるよ？」

そりゃ アンタだからだよ

とか心の奥で無意識に思う。

真由奈の可愛い顔を見て

溜め息をつく。

「試しに聞いてみたら？」

その試しつてのが1番勇気いるんだよねー

「そうだねー」

メールしてみるか…

『加藤君、なんか本貸してゞ（＊・ー・＊）
加藤君は

あっさりOKしてくれた。

しかし

メールの文からして

やや嫌々なのが分かる。

こんなんで本当に平気だろうか？

そんなの考えたところで分かる訳がない。

明日が来るのを

ひたすら待とう

それしか出来ない。

私は無力だ

ホラーで 恋、崖っぷち

「ハア~~~~ア」

相変わらずの朝だった。

昨日と変わったコトと言えば

ちよつと肌寒さを感じる季節が来たコトくらい。

「眠……」

眠たい目をこする

それを見る者は誰もいない

すでに登校した生徒が何人かいるハズなのに

廊下は奇妙なほど静かだった

「うわー……」

寒さに背筋が凍る

『なんかでそう……』

幽霊とか幽霊とか幽霊とか……』

微かな恐怖に肩を震わす

早く教室に行こうと早足で歩く。

「あ。」

私は鏡の前で足を止める

寝グセ……

キュッ

蛇口をひねると冷たい水が出てくる

手をかかく濡らして

髪を撫でつける

「……！」

ハッと気付く

鏡の中

私と重なるようにうつる

もう1人の誰か…

私の真後ろにいる

その人の手が持ち上がる。

『まさか本当に幽霊…!!?』

肩に手がポンともの

ビクッ

大げさなほど体が揺れる

ギョッと閉じた目を

そーっと開ける

「あ…」

鏡越しにうつつたのは幽霊じゃなくて

加藤君だった。

にやにやしながら

私を見る。

「加藤く…ん？」

放心状態で呆然とする私を

あざ笑うかのように

「何驚いてんの？」

と静かに言う

「べつに加藤君こそ　どーしたの？」

「…　ほらよ」

手にしていた本が鞆にのる

「あ。ありがとう」

本当に持ってきてくれたんだ…

やたらと心拍数が上がるのは

この際　気にしないでおう

耳の奥の方でドクドクと鳴り響く心臓

「じゃ、貸し出し料金300円ね」

ハ？

場が一気にしらける

100年の恋もさめるであろう

「うん、分かった」

笑顔を作り教室に逃げる

あっけない

あまりにも あっけない。

加藤君への想いは一気に崖っぷち

「ハー……」

借りた本はホラーもの

『ホラーとか…マジ無理…』

眉間にシワが寄るのを実感

「もう終わるんじゃない？」

心の内に感じた恋の終わり

口に出すと

空しく虚空に消え失せた

波乱、、加藤君じゃダメ、

そして、タイミングも悪く波乱がきた。
まるで、

加藤君への恋を終わらせるかのような
追い討ち。

それは、深く私を悩ませる。

給食が終わった後の休み時間だった

教室のドアのところで

にやつきながら辺りを見回す男子。

私はアイツに嫌な思い出を抱いている。

ソイツは私の元好きな人だった。

1年生最後の日。

アイツは私の気持ちを知ってたか知らずか

「俺、お前のコト大嫌いだったんだよ。

これで、せーせーする」

そう冷酷に告げた。

私はショックで春休みを泣いて過ごした。

アイツの冷酷な言葉

それを告げた声

合わせもしてくれなかった目

それは今でも色濃く思い出せる…

私を今でも苦しめ続ける。

そんな嫌な思い出をアイツに抱いている。
そして、私は…

今でもアイツが好きだ……

報われない 諦めよう…

自分に言いきかせたつもりだった。

だけど、好きな想いは誤魔化せなかった。

報われないなら と

加藤君を想ったけど

やっぱりアイツの方が好きなのは

自分が1番よく分かってる。

ダメだ…

加藤君への想いの浅さに気付かされる。

何かが崩れる

崩れていく…

アイツに会っただけなのに…！！！！

「最悪…」

私が深くため息をこぼすと

横を通った風にかき消された

「希「ノゾム」……」

彼女は、アイツの名前を嬉しそうに呼んで
駆け寄る。

なんで…

何を話してるかは聞こえない

ただ2人が笑って話してる
耳なり…

頭の中はノイズで黒くなる

希のそんな顔：見たコトないや

そんな笑顔

私に向けてくれたコトない

そんな照れるように

顔を赤くして話してもらったコトない

それが私と君の全てだから。

「アノ2人…仲良いね」

「付き合ってるだけあるよね」

「っ」

私は息を飲んだ

そうなんだ…

声が出ない

「え!!!?」

出るのは…涙。

辛い

苦しい

加藤君…

君じゃダメみたい…

加藤君…加藤君…

君じゃ…

ダメなの…

君の心を繋ぐ私

涙がおさまったのは
皆が部活へと ばらけ始めた頃だった

『帰ろ…』

鞆に教科書を入れる
机をまさぐる手に
コツツと何かが当たる。

「？」

そつと出す

あ…

加藤君から借りた本
表紙には

「お前じゃない」
と黒く書かれていた

まるで

私に語るよう…

すばやく それをしまい
教室をあとにした

部活が終わり
いつものメンバーと帰る

私は真由奈に
「コノ本

加藤君に返しといて」
と言って本を渡した

借りたのは昨日だが読み終わっていた

真由奈が

なかなか受け取らない

「真由奈？」

「いやー…あのお」

「？」

「自分で返すべきじゃない？」

あまりに真由奈がしぶるので
何かあるのでは？

と思い考えた。

『加藤君が真由奈に告った？』
ありえる

私は

きっと そうだと思って

『真由奈に何かした？』

とメールを送った。

しかし

答えはNO。

じゃあ

一体 何があつたの？

気にはなつたが

何も言わなかった。

私の中で

加藤君が真由奈を好きなのは
確信となっていたから…

でも

違かったの？

違かったのネ。

知らなかった。

知りたく…なかった

「ねえ真由奈お願い」

私はしつこく

真由奈にお願いした

真由奈と加藤君の間に

恋愛という感情があるなら

是非とも

見たい

「ダメだって」

しかし

真由奈もしぶとい

「どうしたの？」

割って入ったのは

真由奈と加藤君と同じ部活の
青木さん

「真由奈が加藤君に
本返してくれないのお」

青木さんに

加勢してもらおうと

甘い声を出した

「だって加藤だよ!？」

「あーそれは

自分で行くべきじゃない？」

2人が顔を見合わせ

ニヤリとする

「え？」

直接渡さないと

加藤君 怒るの？」

彼女達は

何も言わなかった

もう渡してはくれないと思って

私は

しぶしぶ加藤君のトコロへ

行った

加藤君の教室の前に行くと

加藤君と同じクラスの友達がいた

私は

「加藤君に渡しといて」
と

本を渡した

「OK」

友達は

教室に入って

加藤君のトコロに行く

『コレ』

と言って友達が

本を渡す

『？』

と私の友達を見る

すると

『由紀「ユキ」が』

そう言っで私を指さす

加藤君は

私を見る

加藤君

そう口パクで言っで

手を大きく振った

私は

すぐ目線を外した

彼がどんな顔をしてたか

私は

見てなかった

きっと

見ても

気付かなかった

私は未だに

アイツから

心を引き離せてない。

だから、

加藤君という人間を

真っ直ぐ見つめれない

そう…

私は思ってた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3178f/>

図書室の貴公子、加藤君。

2011年1月28日14時35分発行